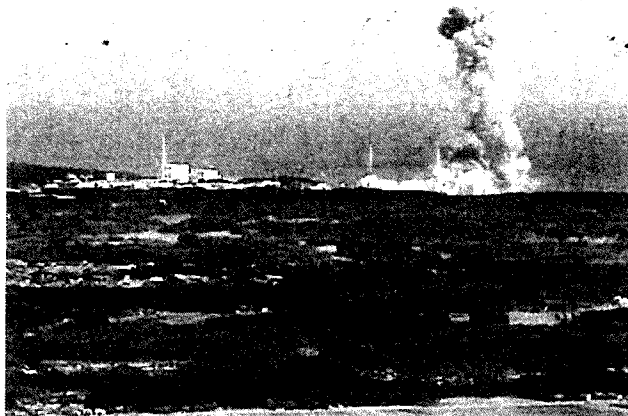


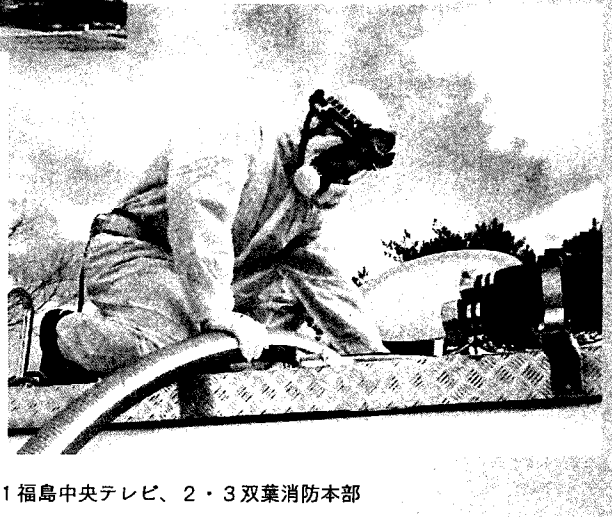
福島

連載……第3回

3号機爆発



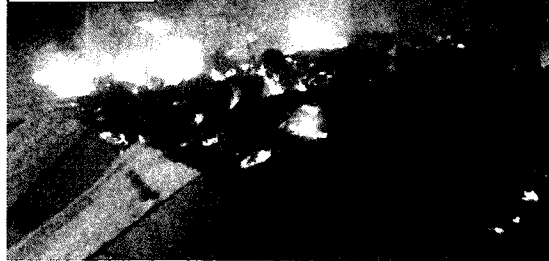
1—3号機爆発と立ちのぼる「きのこ雲」
2—暴走する原発の冷却水給水要請を東電から受ける
3—避難指示が出た町で火災発生。消火活動に向かう（浪江町加倉地区）



写真提供：1 福島中央テレビ、2・3 双葉消防本部

吉田千亜

よしだ・ちあ フリーライター。著書に『ルポ母子避難』（岩波新書）、『その後の福島』（人文書院）、共著に『原発避難白書』（人文書院）ほか。



世界 SEKAI 2019.5

横山典生（38・富岡消防署消防司令補主査）は、たった二日前の、大地震と津波の後の世界が、いま、どこに向かっているのか、わからなかった。

福島第一原発の一号機が爆発し、富岡消防署を閉鎖して、原発から半径二〇キロの外にある川内出張所に移動が決まった。暗くなった道を照らす車のライト二本の光の筋に、キラキラとした粉が舞っている。「死の灰」。横山は思った。みんな「これはやばい」と、うっすら思っている。でも、誰もそれを口にはしない。口にしても、降ってくるものを避けられるわけでもなく、川内村に移動しないわけにもいかない。救急・救助活動がある以上、屋内にこもり続けるわけにもいかない。

沈黙のまま川内村へと運ばれる車の中で、横山は、家族のことを思っていた。妻と子どもは、いま、どこにいるのか。

双葉厚生病院で看護師として勤務する妻も、発災後、仕事から抜け出せなかったため、非番だった横山は子どもたち三人を学校と保育園に迎えに行き、富岡消防署に連れてきていた。一号機爆発の少し前に、妻が消防署にいる子どもたちを迎えに来て、職場の双葉厚生病院に連れて行ったのだ。救急搬送で出っ放しになってしまふ横山より、看護師である妻のほうが確実に子どものそばに居られる。

しかし、爆発直後に「しまった……」と横山は思った。ここよりも、妻の職場のほうが原発に近い。職場に戻らせずに

妻も子どもたちも、避難させればよかったと、悔いた。

この爆発の前に、すでに妻や子どもが、病院の患者たちとバスに乗って西に向けて避難をしていたことは、横山には知る術がない。ただただ、案じるしかなかった。

原発事故対応に関して、東京都のハイパーレスキュー隊や自衛隊の活動はメディアにはのったが、双葉消防本部の活動は、事故当時、メディア取材に応じないという方針だったため、それほど知られていない。

地震・津波の発生から休む暇もなく救急・救助活動を続けていた双葉消防本部の一二五人の消防士たちは、避難指示があった二〇キロ圏内にある浪江消防署・富岡消防署・楡葉分署から移転を余儀なくされ、圏外にある川内出張所と葛尾出張所へと分かれ、管内の消防活動を継続することになった。

三月一三日早朝、東京電力から「福島第一原発ろ過水精製のため六トンの水槽が必要。原液輸送車が可能であれば、免震重要棟の前まで来てほしい」という淡水搬送要請が入る。前日に一号機が爆発したばかりの現場へ、双葉消防から、二隊、五名の職員が向かった。

高線量地帯での冷却水の給水

遠藤朗生（44・浪江消防署消防司令補主査）たち五名は、一二時五九分に第一原発の正門に到着した。原発に近づくとつれ、

ポケット線量計の「ピッ」という音の間隔がどんどん短くなり、とうとうほとんど間隔はなくなった。「作業を早めに終わらせて早く帰ろう」と、全面マスク越しに同僚と言葉を交わす。

免震重要棟で東京電力から給水活動の説明を受け、誘導車で二号機と三号機の間へと向かった。現場到着は一三時二六分。前日に爆発した一号機の建物の上部は崩壊し、あたり一面に瓦礫が散乱していた。どの瓦礫が放射線量の高いものなのか、わからない。岡本博之（38・富岡消防署消防司令補主査）は「とんでもないところに来た」と感じた。いつ、どの原子炉が爆発するか、生きて帰れるのかもわからない。

防火水槽に水を入れるという活動だった。双葉消防本部の所有する原液輸送車では注水作業ができないため、一緒に乗って来たポンプ車で水槽に水を送り出すという作業を想定していた。そのために五名、車両は二台で向かったのだ。しかし、現場に到着すると、東電の自衛消防団のポンプ車が待機していた。それを使うのだという。車両が違うということは、操作手順も変わるということだ。

消防から向かった五名は、消防が所有する車両ならば操作も、今回の要請に必要な手順も把握していた。しかし、改めて東電のポンプ車の操作説明を受けることになり、予定よりも時間がかかった。

「東電のポンプ車を使うのなら、最初から少人数で行けば